

[タイトル]

企業アーカイブズとしての 高島屋史料館に関する一考察

A Study on the Takashimaya Historical Museum as Business Archives

[著者]

渡邊美喜 | Miki Watanabe

[キーワード]

| 企業アーカイブズ | 高島屋 | 高島屋史料館 | 組織アーカイブズ | CSR |
business archives / Takashimaya Company Limited / Takashimaya Historical Museum /
in-house archives / corporate social responsibility

[要旨]

本論文は、高島屋史料館が高島屋の企業アーカイブズと評価しうることを明らかにした上で、今後求められる視点を提言する。1831(天保2)年、京都に古着木綿商として創業した高島屋は、1970(昭和45)年大阪に高島屋史料館を開設した。筆者は高島屋史料館で調査を実施し、その所蔵資料を文書、図書、モノの3者に大別、それぞれを高島屋の企業活動との関連付けを試みた。所蔵資料の分析を通じて文書、図書、モノのいずれの分類においても、高島屋史料館が収蔵するものには高島屋の企業アーカイブズとしての資料的価値をもつものがあることを実証。よって高島屋史料館は企業アーカイブズとしての側面をもつという結論へと導いた。終章では、2011(平成23)年に創業180周年を迎えた高島屋での企業アーカイブズの活用事例と高島屋史料館をめぐる近年の情勢をまとめ、今後の活動に当っては、企業アーカイブズ、ならびに組織アーカイブズという視点が高島屋史料館に求められると提言した。

This paper evaluates the Takashimaya Historical Museum as business archives, and proposes the importance of its perspective in the future. Takashimaya, one of the major department stores in Japan, began as a used clothing business in Kyoto in 1831 and established the Takashimaya Historical Museum in Osaka in 1970. Based on the survey, the holdings of the museum are divided into three categories: records, books, and objects. Through an analysis, we found that these categories may have some connection with Takashimaya's corporate activities. Accordingly, this paper demonstrates that the Takashimaya Historical Museum holds the business archives of Takashimaya; thus, the museum should be recognized as business archives. The final chapter summarizes the recent utilization of the Takashimaya business archives and the circumstances of the museum. Eventually, this paper proposes that the Takashimaya Historical Museum requires two perspectives in the future: that of business archives and that of in-house archives.

1 —— 本論の問題意識とその対象

1-1 : はじめに

2008(平成20)年10月高島屋は、阪急阪神百貨店を傘下にもつエイチ・ツー・オーリテイリングとの経営統合を目指し、基本合意に達したと発表した。両社トップが揃った記者会見の場で互いの強みについて尋ねられた時、相岡俊一エイチ・ツー・オーリテイリング会長は、「高島屋の持つ歴史や格式などに裏打ちされた文化的なイメージは我々にとっても大きな資産」と答えている[1]。また『高島屋の経営』では高島屋の特色を浮き彫りにするために、「古くて新しい店」、「経営における先進性」、「近代的な同族経営」、「国際化を先取る」、「多角経営」といった章が設けられた[2]。高島屋に与えられるこうしたイメージや評価が果たして適当であるかを検証するにあたり、重要な役割を果たすのが企業活動の中で生み出される記録物である。

日本において企業の記録物に関する論議は、文書が中心である。かつては経済学、経営学といった視点によるものであったと指摘される[3]。近年は、アーカイブ学的見地に基づく記録管理の一環、あるいは経営資源として企業の記録物をとらえる研究事例も見られるようになった。それに加えて特徴的なことは、社史編纂事業との深いつながりであり[4]、報告事例も数多い[5]。

しかしながら、企業活動の中で生み出される記録物とは、文書だけにはとどまらない。2006年、企業史料協議会は会員配布用として、『ビジネスアーカイブズ入門ガイド』を刊行した。同書で示される収集資料の分類法のひとつに、「文書資料と非文書資料」がある[6]。非文書資料とは写真、図面、販促物など多様で、文書以外への目配りが見られる。海外での事例報告によると、企業の文書のみならず、モノ資料をも活用した展覧会が開催されている[7]。この展覧会は企業にとって長期的な商業上の効果をもたらしたと述べ、それはコーポレート・アイデンティティ、従業員の関与、ブランドマーケティング、商品とブランドの宣伝などである。

2010年、京都市美術館[8]で「高島屋百華展」という展覧会が開かれた[9](図1参照)。高島屋創業の地である京都を舞台としたこの展覧会は、高島屋史料館の収蔵資料を用い、日本近代美術の足跡をひもとこうとするものである。展覧会の批評記事において、明治後期の日本で美術普及に百貨店が果たした役割が指摘された[10]。この他、同時期に同じく京都市美術館で開催されていた別の展覧会とともに、アカデミズムと商業文化の両者がともにけん引してきた京都画壇の歩みを立体的に感じさせるものと高く評価される[11]。高島屋史料館は、高島屋の株式会社設立50周年記念事業のひとつとして、1970(昭和45)年、大阪に設立された。ここには美術作品や能装束、呉服のほか、美術染織、ポスターなどが収められるという[12]。また展示はするものの、調査研究を目的とした資料公開を行う

1 —— 辻森尚仁、佐藤亜季「高島屋とH2O、経営統合に基本合意 トップ会見」、「朝日新聞」2008年10月11日、朝刊(大阪版)、15面 経営統合は2010年3月に中止され、業務提携が結ばれた。

2 —— 田中政治、和田進「高島屋の経営」、評言社、1980年、6-7頁

3 —— 小風秀雅「近代の企業記録」、国文学研究資料館史料館編『アーカイブズの科学』下、柏書房、2003年、73頁

4 —— 全国歴史資料保存利用機関連絡協議会監修『文書館用語集』は「企業アーカイブズ」(business archives)の項で、史料そのものと、組織あるいは施設という、2つの語義を提示している。さらに後者については、「日本では、記録管理制度と直結して設置される例は少なく、社史編纂事業との関連性が強い」と付言する。「企業アーカイブズ」、全国歴史資料保存利用機関連絡協議会監修『文書館用語集』、大阪大学出版会、1997年、24頁

5 —— 企業史料協議会の研究誌である『企業と史料』では、第3集(1989年刊行)、また第6集(1998年刊行)がともに会社史編纂を特集している。

6 —— 企業史料協議会制作部会編『ビジネスアーカイブズ入門ガイド』、企業史料協議会、2006年、19-20頁 他に「現用・半現用・非現用文書」、「一次資料、二次資料、ヒアリング記録」といった分類方法が記される。

7 —— ケイティ・ローガン、シャーロット・マッカーシー、拙訳「アーカイブズを展示することによる商業上の効果」、沢尻栄一記念財団実業史研究情報センター編『世界のビジネス・アーカイブズ：企業価値の源泉』、日外アソシエーツ、2012年、71-90頁

8 —— 京都市美術館は1933年に開館した大札記念京都美術館がその前身であり、創立の契機となったのは、1928年に京都で行われた昭和天皇即位の大典であった。京都市長土岐嘉平を中心に設立された大札奉祝会は、その記念事業として美術館の建設を計画する。株式会社高島屋の2代社長であった四代飯田新七は美術館建設委員であったばかりか、開設当時の評議員を京都市議会議長石田吉左衛門ら8人とともに務めた。この項は、『京都市美術館四十年史』、京都市美術館、1974年による。

9 — 「高島屋百華展：近代美術の歩みとともに」、会期：2010年9月18日－10月29日、会場：京都市美術館、主催：京都市美術館、朝日新聞社、特別協力：株式会社高島屋。

10 — 高階絵里加「美術普及、百貨店の功績」、「日本経済新聞」2010年10月18日朝刊（地方経済面近畿特集）、31面

11 — 河村亮「美術トピックス 通底する京都らしさ 日本画の誕生展と高島屋百華展」、『京都新聞』2010年10月16日、朝刊、9面 あわせて言及された展覧会は、「京都市立芸術大学創立130周年記念展：京都日本画の誕生 巨匠たちの挑戦」、会期：2010年9月25日－11月7日、会場：京都市美術館、主催：京都市立芸術大学、京都市美術館、毎日新聞社、京都新聞社。

12 — 高島屋史料館「高島屋史料館」、2007年（リーフレット）

13 — 大江善三編『高島屋百年史』、高島屋本店、1941年 高島屋135年史編集委員会編『高島屋135年史』、高島屋、1968年 高島屋150年史編纂委員会編『高島屋150年史』、高島屋、1982年 高島屋CSR推進室 180年史編纂室編『おかげにて一八〇』、高島屋、2013年 以下断りのない限り、『高島屋150年史』および『おかげにて一八〇』に基づき記述する。



図1 — 「高島屋百華展」チラシ

施設ではないこともあり、収蔵資料の全貌は測りがたい。

本論文は、高島屋史料館が高島屋の企業アーカイブズと評価しうることを明らかにした上で、高島屋史料館に今後求められる視点を提言するものである。本稿では、企業活動の中で作成、収受される記録物を企業アーカイブズ (business archives) と呼ぶ。それには文書のみならず、図書、モノも包含される。また、こうした記録物を収める組織あるいは施設も同様に、企業アーカイブズとする。

そこで、はじめに高島屋史料館の母体となる高島屋の歴史を振り返り、高島屋史料館の設立に至る経緯を示す。つぎに高島屋史料館で実際に調査を実施し、所蔵される資料の概要とその特徴を表わす。そして収蔵資料を文書、図書、モノの3者に大別し、それぞれについて高島屋の企業活動との関連付けを試みる。こうして最終的には、文書、図書、モノのいずれの分類においても、高島屋史料館が収蔵するものには高島屋の企業アーカイブズとしての資料的価値をもつものがあることを実証。よって高島屋史料館は企業アーカイブズという側面をもつ施設であるという結論へと導く。終章では、2011年に創業180周年を迎えた高島屋での企業アーカイブズの活用事例と高島屋史料館をめぐる近年の動きをまとめる。こうした高島屋史料館をとりまく現在の状況を踏まえ、最後にこれからの高島屋史料館に求められる視点を提言する。

1-2: 高島屋と高島屋史料館

高島屋の沿革

はじめに、高島屋史料館の設置母体としての高島屋を考える。高島屋はこれまでに社史を数度刊行している[13]。ここでは社史などに表わされる記述をもとに、高島屋の創業以来の歩みを追う(表1「高島屋の沿革年表」参照)。

高島屋は、1831(天保2)年飯田新七が、京都烏丸通松原上ル西側に古着木綿商「たかしまや」を開業したことに始まる。飯田新七は1803(享和3)年、越前国敦賀に中野宗兵衛の三男として誕生、幼名を鐵次郎といった。京都に出て、呉服商に奉公し、新七と名乗るようになる。そして1828(文政11)年に飯田儀兵衛の長女秀の婿養子となって、飯田姓が変わった。近江国高島郡(現・滋賀県高島市)の出身である飯田家は、京都烏丸通松原上ル西側で米穀商を営み、出身地に因んで屋号を「たかしまや」としていた。1829年に新七は分家して古着の行商を始め、上述の通り1831年に古着木綿商を創業する。

新七と秀とのあいだには2人の娘が誕生し、1851(嘉永4)年に上田直次郎を長女歌の婿に迎えた。そして1855(安政2)年に古着木綿商から呉服木綿商へ改めた後、新七は隠居して娘婿に家督を譲り、直次郎が二代新七を襲名する。外国人また堺や住吉で手織り敷物を扱う段通商との取引開始、第6回京都博覧会(1877(明治10)年)をはじめとする博覧会に出品して褒状を受領、装飾部[14]の前

身となる段通店(南店)の開店(1878年)といった事績はすべて、二代新七の時代のことである。妻とのあいだに五男二女に恵まれるが、1878年二代新七は52才で死去した。そこで長男直次郎が二十代半ばにして相続し、三代新七となる。末弟はまだ3才と幼く、三代新七は頑強な身体とはいえなかった。そのため、賢女と讃えられた母歌を中心に、三代新七とその弟たちは力を合わせ、高島屋の発展に尽力する。高島屋の「飯田六家」といわれる同族経営はこの世代に始まる。六家とは長男直次郎(三代新七)を筆頭として、二男鐵三郎(四代新七)[15]、三男政之助、四男藤二郎、五男太三郎らの5人兄弟と、二女千代の夫で婿入りして飯田姓を名乗った忠三郎ら6人を創始とする一族を指す(図2「飯田家系図」参照)。

1887年、御堂筋本町北に大阪出張仮事務所を設置して、高島屋は大阪での足がかりを得る[16]。外国人の利用が多くなってきたことに応じて同年、貿易部を開設し、京都の店の北隣りに新築した店(北店)の2階を売り場とした。1888年にはバルセロナ万国博覧会に出品して、海外の博覧会への参加を始める。翌年、パリ万国博覧会の見学を兼ねて、四代新七は7カ月にも及ぶ欧米視察を行った。その折に輸出貿易の必要性を痛感した四代新七は、東向かいを買収して1893年に新たな店舗を開き、高島屋飯田新七東店として外国人向けの商品を扱うようになる。こうして日本国内において東京(1890年、事務所設置)、神戸(1897年、事務所設置)、横浜(1900年、高島屋飯田新七横浜貿易店開設)と進出したばかりでな

14 — 裝飾部とは、壁張り、窓掛、椅子張りなど建築物の裝飾織物の製作に始まり、敷物、家具、調度の設計を業務とする。このほか、船舶裝飾や劇場の緞帳なども手掛けた。1988年に建築事業本部となり、2001年には関連会社である高島屋工作所(1939年設立、船舶や車両の内装、家具製造)と統合、高島屋スペースクリエイツ株式会社が発足する。

15 — 1888年、三代新七は弟鐵三郎に家督を譲り、鐵三郎は四代新七を襲名する。以後三代新七は新兵衛と名乗り、後見役となって弟を支える。

16 — 1887年、御堂筋本町北に大阪出張仮事務所を設けたのち、1896年に北区堂島中町、さらにはその翌年に南区順慶町に出張所を移転した。1898年に心齋橋に店舗を構え、「京都たかしまや呉服店飯田新七大阪支店」としたのが最初の大阪の店である。その後、大阪の中で店舗の変遷があり、現存する店舗は1932年に全館開店した南海店である。

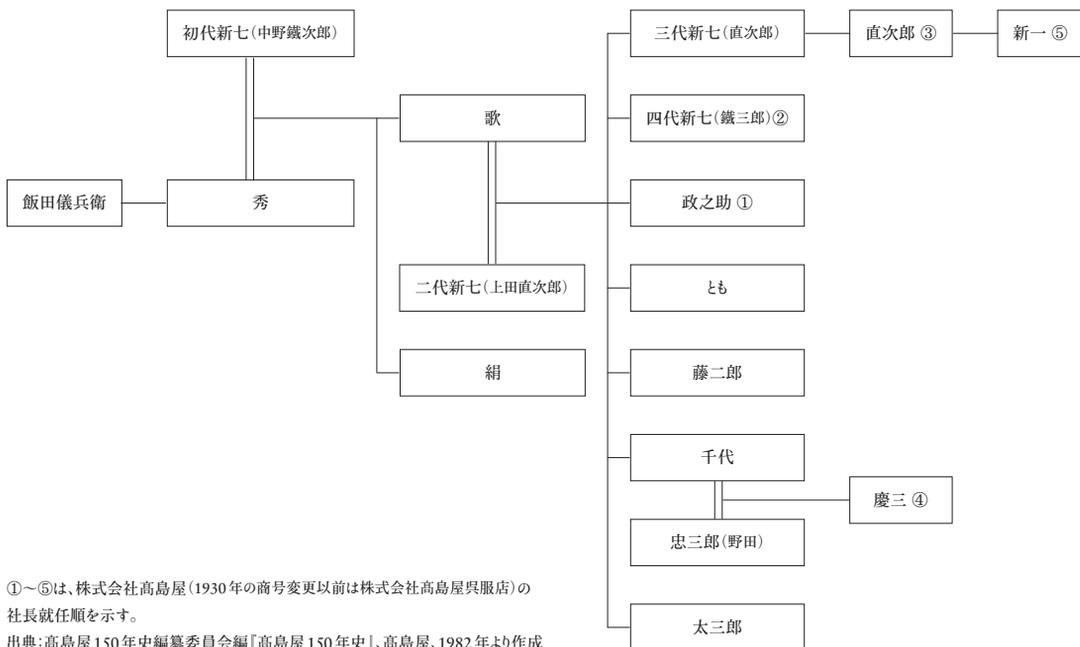


図2 — 飯田家系図

表1 高島屋の沿革年表

西暦	和暦	事項
1803年	享和3年	中野鐵次郎、越前国敦賀に中野宗兵衛の三男として誕生のち新七と改める
1828年	文政11年	中野新七、飯田儀兵衛長女秀の婿養子となる 飯田家は近江国高島郡南新保村の出 京都烏丸通松原上ル西側に米穀商を営み、屋号を「たかしまや」と称す
1831年	天保2年	1月10日飯田新七、京都烏丸通松原上ル西側に古着木綿商「たかしまや」を開業
1851年	嘉永4年	上田直次郎を新七長女歌の婿に迎える
1855年	安政2年	呉服木綿商に改める
1856年	安政3年	初代新七隠居して新兵衛(真兵衛)と改め、直次郎が二代新七を名乗る
1864年	元治元年	蛤御門の兵火により店舗全焼
1874年	明治7年	初代新七死去
1876年	明治9年	アメリカの商社スミス・ペーカー来店、外国人商人との取引の初め
1877年	明治10年	大阪堺・住吉の段通商と取引開始 第6回京都博覧会に出品、褒状を受ける(博覧会出品ならびに受賞の初め)
1878年	明治11年	南隣を外国人向け段通専門店として開店、南店とする(装飾部の起源) 二代新七死去 二代新七長男直次郎、三代新七を名乗る
1881年	明治14年	第2回内国勸業博覧会で受賞(第5回展まで受賞を続ける)
1887年	明治20年	皇居造営につき窓掛け、壁張り、緞帳、椅子張りなどを受注 御堂筋本町北に大阪出張事務所を設置 北隣りに北店を設け、その2階に貿易部(輸出部)を置く
1888年	明治21年	三代新七家督を譲って引退し、新兵衛と名乗る 鐵三郎(二代新七二男)、四代新七となる バルセロナ万国博覧会に刺繍を出品、銀牌を受ける (海外博覧会出品ならびに受賞の初め)
1889年	明治22年	四代新七、パリ万国博覧会視察を兼ね、7ヵ月に及ぶ欧米視察
1890年	明治23年	東京事務所開設
1893年	明治26年	京都東店(貿易店)を開業 外国人観光客向け商品を販売
1897年	明治30年	東京仮出張所設置 宮内省御用達の指定を受ける
1898年	明治31年	心齋橋に大阪店開店
1899年	明治32年	リヨン出張所開設
1900年	明治33年	高島屋飯田新七横浜貿易店開設 東京市京橋区西紺屋町に東京店開店
1902年	明治35年	京都店、月刊PR誌『新衣裳』創刊
1905年	明治38年	天津に義大(いいた)洋行開設
1906年	明治39年	ロンドン出張所開設
1907年	明治40年	二代末亡人歌死去
1909年	明治42年	三代新七死去 京都店にて現代名家百幅画会を開催(大阪店で翌月) 高島屋飯田合名会社に組織変更(資本金100万円) 社長四代飯田新七
1910年	明治43年	ロンドン日英博覧会に出品、高島屋館を設ける
1911年	明治44年	心齋橋店に美術部創設
1912年	明治45年	日本初の鉄筋コンクリート造店舗として京都烏丸店新築開店

出典:『高島屋150年史』、
『おかげにて一八〇』、
『高島屋美術部百年史』などに
掲載される年表をもとに作成

西暦	和暦	事項
1913年	大正2年	新柄流行品「百選会」を創設
1916年	大正5年	貿易部が独立して、高島屋飯田株式会社設立 ----- 東京店を京橋区南伝馬町に移転開店 美術部開設
1919年	大正8年	心齋橋店罹災 美術部は江戸堀へ移転 ----- 株式会社高島屋呉服店に組織変更、初代社長に飯田政之助就任 本店所在地 京都市下京区烏丸通高辻下ル因幡堂町661番地 ----- 東京市内有力呉服店の三越、松坂屋、白木屋、松屋、高島屋により、 親睦会組織「五服会」発足
1920年	大正9年	第1回定時株主総会を京都店にて開催
1922年	大正11年	大阪堺筋に長堀店開店 心齋橋店閉鎖
1923年	大正12年	関東大震災発生 東京市内の百貨店各店舗罹災 ----- 東京店、千代田館で仮営業開始
1926年	大正15年	長堀店に10銭均一売場開設
1927年	昭和2年	東京店、旧店舗跡で新築開店 ----- 初代社長飯田政之助辞任 四代新七社長就任
1930年	昭和5年	株式会社高島屋に商号変更 ----- 難波駅に南海店一部開店
1931年	昭和6年	創業100周年を迎える
1932年	昭和7年	南海店全館開店
1933年	昭和8年	日本橋に東京店新築開店
1936年	昭和11年	第1回「上品会」開催
1937年	昭和12年	百貨店法施行
1938年	昭和13年	丸高均一店設立 ----- 初代社長飯田政之助死去
1939年	昭和14年	長堀店を閉鎖し、南海店に統合
1942年	昭和17年	2代社長飯田新七が相談役に退く 飯田直次郎社長就任
1944年	昭和19年	2代社長飯田新七死去 ----- 定時株主総会において、 本店所在地を大阪市南区難波新地六番町14番地に変更
1945年	昭和20年	終戦
1952年	昭和27年	3代社長飯田直次郎死去の翌月、飯田慶三社長就任 ----- 包装紙を薔薇をモチーフとしたものにする
1955年	昭和30年	高島屋飯田株式会社、丸紅と合併し、丸紅飯田株式会社となる
1960年	昭和35年	4代社長飯田慶三、会長に退き、5代社長に飯田新一就任
1970年	昭和45年	高島屋史料館を高島屋東別館(大阪)に開設
1981年	昭和56年	創業150周年を迎える
1987年	昭和62年	5代社長飯田新一、会長に退き、6代社長に日高啓就任
1989年	平成元年	高島屋グループの年間売上高が1兆円を超える
1990年	平成2年	公益信託タカシマヤ文化基金創設
1996年	平成8年	商法違反事件
2006年	平成18年	CSR推進室設置
2009年	平成21年	東京店本館が重要文化財に指定
2011年	平成23年	創業180周年を迎える

17 — 1955年に丸紅と合併して丸紅飯田株式会社となり、1972年に丸紅株式会社と商号変更する。

18 — 以降今日に至るまで商号の変更はなく、複雑になるため株式会社は略して表記する。

19 — 「本店と本社」、高島屋135年史編集委員会、前掲書、1968年、266頁
20 — 南海店を指す。長堀店は1939年に南海店に統合された。

21 — 「高島屋グループ、年間総売上高一兆円を突破」、『日経流通新聞』1989年2月23日、10面 なお高島屋では、営業年度を3月から翌年2月までの12カ月としており、ここでいう年間とは1988年3月から翌年2月までの1988年度を指す。

22 — 京都、大阪、東京(1900年)に加え、和歌山(1973年)、堺(1964年)、洛西(1982年)、泉北(1974年)、岡山(1973年)、岐阜(1977年)、米子(1964年)、横浜(1959年)、港南台(1983年)、立川(1970年)、玉川(1969年)、柏(1973年)、大宮(1970年)、高崎(1977年)の17店。東京、立川は店舗の移転があるが、ここでは()内にその地域で高島屋が初めて店を構えた年を示す。なお高島屋グループには百貨店の他、関連企業が含まれる。

23 — 高島屋、「タカシマヤ各店のご案内」、高島屋ホームページ、<http://www.takashimaya.co.jp/store/index.html?header>(2013.09.30入手)

24 — 高島屋、「第147期株主レポート」、高島屋ホームページ、11-12頁、<http://www.takashimaya.co.jp/corp/ir/report/147/147report.pdf>(2013.09.30入手)

25 — 高島屋史料館については、「高島屋史料館の開設(昭和45年-1970)」、高島屋150年史編集委員会、前掲書、1982年、368頁に基づく。

26 — 高島屋東別館については、「70高島屋東別館」、高岡伸一、三木学編著、橋爪紳也監修『大大阪モダン建築』、青幻舎、2007年、126頁、ならびに酒井一光「発掘the OSAKA FILE065:高島屋東別館」、『大阪人』61巻10号、2007年、63頁に多くを負う。

く、フランス(1899年、リヨン出張所設置)、イギリス(1906年、ロンドン出張所設置)、中国(1905年、天津義大洋行設立)、オーストラリア(1905年、シドニー代理店設置)など、海外にも事業を展開していく。個人経営からはじまった高島屋は、1909年に高島屋飯田同名会社へと組織を改め、1916(大正5年)には貿易部門が分離独立して高島屋飯田株式会社が誕生した[17]。さらに百貨店部門は1919年、株式会社高島屋呉服店へと発展し、1930年に商号を株式会社高島屋に変ずる[18]。いずれの時点でも本店は京都に置かれたままであったが、実質的には1922年、大阪に長堀店を開設するに伴い、本店事務所がその別館に設けられた[19]。

戦前期は京都、大阪、東京の3都市に店舗を構え、太平洋戦争後の高島屋の復興は大阪の店[20]が主導して行われた。そして1944年3月の定時株主総会において、高島屋の本店所在地を創業の地である京都から大阪へ変更することが定まった。1989年には高島屋グループの年間売上高は、百貨店業界で初めて1兆円を超える[21]。この時、高島屋の店舗は国内においては17店へと拡大していた[22]。

この間、飯田六家による高島屋の経営が長らく続く。1960年、三代新七の孫に当たる飯田新一が社長に就任し、30年近くトップであり続ける。そして1987年に飯田新一が退任、その後任となる6代社長に日高啓が就任したことにより、創業以来150年以上におよぶ飯田家を中心とした体制は終わりを告げた。日高は、本社総務部長らが株主総会の対策として暴力団組長らに利益供与を行った商法違反事件の責任をとって1996年に辞任し、以後田中辰郎(1996年-2001年)、増倉一郎(2001年-2003年)、鈴木弘治(2003年-)が社長を務める。

2011年に創業180周年という節目を迎えた高島屋は、2013年時点では国内に20店、海外に3店を構える[23]。グループ企業は百貨店、商業ディベロッパー、食品ブランド・レストラン、インテリア、クレジットカード、広告宣伝、人材派遣・業務サービス、海外などの事業分野において、30社に及ぶ。2012年度のグループ総営業収益は8,703億円であり、そのうち高島屋単体では6,903億円と、およそ80パーセントを占めている[24]。

高島屋史料館 その設立と現況

つぎに高島屋史料館の設立に至る経緯と、近年の状況を表わす。

1969年に株式会社設立50周年を迎えた高島屋が、その記念事業のひとつとして翌年に設立したのが高島屋史料館である[25]。大阪市浪速区日本橋にある高島屋史料館(以降、史料館と略することもある)は、大阪店から徒歩10分ほどの距離にある、高島屋東別館[26]の一角を占める。

高島屋東別館は、1937年に建造されたかつての松坂屋大阪店であり、夏目漱石の義弟にあたる鈴木禎次が設計した[27]。鉄骨鉄筋コンクリート造7階建地下2階の「東洋一の百貨店」と称されたこの建物は、近代商業建築のひとつと

して高く評価される。松坂屋大阪店は、太平洋戦争による被害は少なかったが、1948年まで連合国軍最高司令官総司令部(GHQ)に高層の6、7階を接収されたこと、また立地条件の悪化などにより、戦後の業績は伸び悩んだ。そこで京阪天満橋駅の上部と隣接地に京阪電鉄、竹中工務店、松坂屋3社の共同出資による京阪ビルディングを建設することを決定する。そして1966年10月に移転開店することとして、日本橋の店はその前月に閉店した[28]。高島屋は1968年11月にこれを竹中工務店から借用して大阪店東別館とし、翌年10月に購入する。現在東別館は、高島屋の本社ならびに大阪店の事務所としての機能を持ち、一般公開されている部分は高島屋史料館などに限定される[29]。

高島屋史料館の設立は当時、会長の職にあった飯田慶三の提唱による。史料館が東別館の中で占有している面積は1,123平方メートルあり、このうち公開部分は常設展示場と企画展示室の2つを有す。展示は無料公開され、主として史料館の収蔵資料を用い、常設展示場では高島屋の歴史を、一方企画展示室ではテーマを設けて展示を構成する。それ以外は非公開であり、事務所と応接間の他に、保管施設、機械室をもつ。

史料館は設立以来、本社総務部に属し、1982年刊行の『高島屋150年史』においても総務の項目に記載されていた[30]。しかしながら2008年6月より本社美術部へ移管される(図4「高島屋組織図」参照)[31]。2009年に高島屋は企業史料協議会に入会し、企業史料協議会関西分会主催による史料館の見学会が翌年6月に催された。その参加報告記によると、2009年3月に「アーカイヴズ・プロジェクト」が発足した[32]。このプロジェクトは、東京と大阪においておよそ10名体制をとり、資料の整理・分類、調査・研究(特に150年史以降)、データベース化、ネットワークによる検索システムの構築、成果のまとめと発表、外部のコンサルタントや学者・研究者の採択などの活動を行うという。

2 —— 所蔵資料の調査、分析に基づく

高島屋史料館の企業アーカイヴズとしての評価

2-1: 調査の方法と結果

高島屋史料館を紹介するリーフレット(図3参照)ではその所蔵品を、「絵画・美術工芸品・彫刻や明治・大正・昭和各時代の御大典を含む御用裂、江戸中期以降の能装束、その他内外の染織参考裂など」と述べる[33]。主な収蔵作家として40以上もの作家の名前が、日本画、洋画、工芸・彫刻、美術染織の4分野に分けられて挙がる。そして常設展示場において、「創業以来の高島屋の諸史料を展示」という。こうした表現から、高島屋史料館が収蔵する資料の全体像を描くことは難

27——名古屋を創業の地とする松坂屋の大阪進出は、1875年、大阪新町通(現・西区新町)にあった「えびす屋」という呉服店大阪支店をはじめとする。1909年には、経営資源の集約のためいったん撤退したが、1923年に日本橋に再度開店する。当初は木造3階建てであったが、1927年以来3期に亘る増床増築工事を行い、1937年には正面の間口104メートルにも及ぶ総面積3万8,400平方メートルという大建造物となる。本稿での松坂屋に関わる事項は、『松坂屋百年史』、松坂屋、2010年による。

28——天満橋の店は、2004年に業績低迷により閉店する。

29——高島屋大阪店が運営する友の会組織ローズサークルのカルチャー教室の他、テナントとして喫茶店、結婚式場が入る。

30——第3編「本史2」、第4章「総務」、第1節「組織・制度・人事労務」

31——高島屋本社美術部担当者の指示による。

32——恩田幸敏「「第8回関西分会」参加報告」、『企業史料協議会ニューズレター』135号、2010年、1頁。なお「アーカイヴズ・プロジェクト」は、高島屋での表記にならなかった。

33——注12に同じ。御用裂とは、皇室や政府などから注文を受けた染織物。

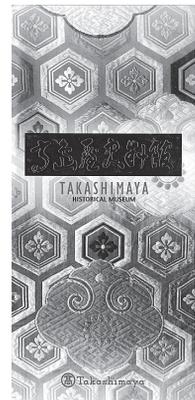
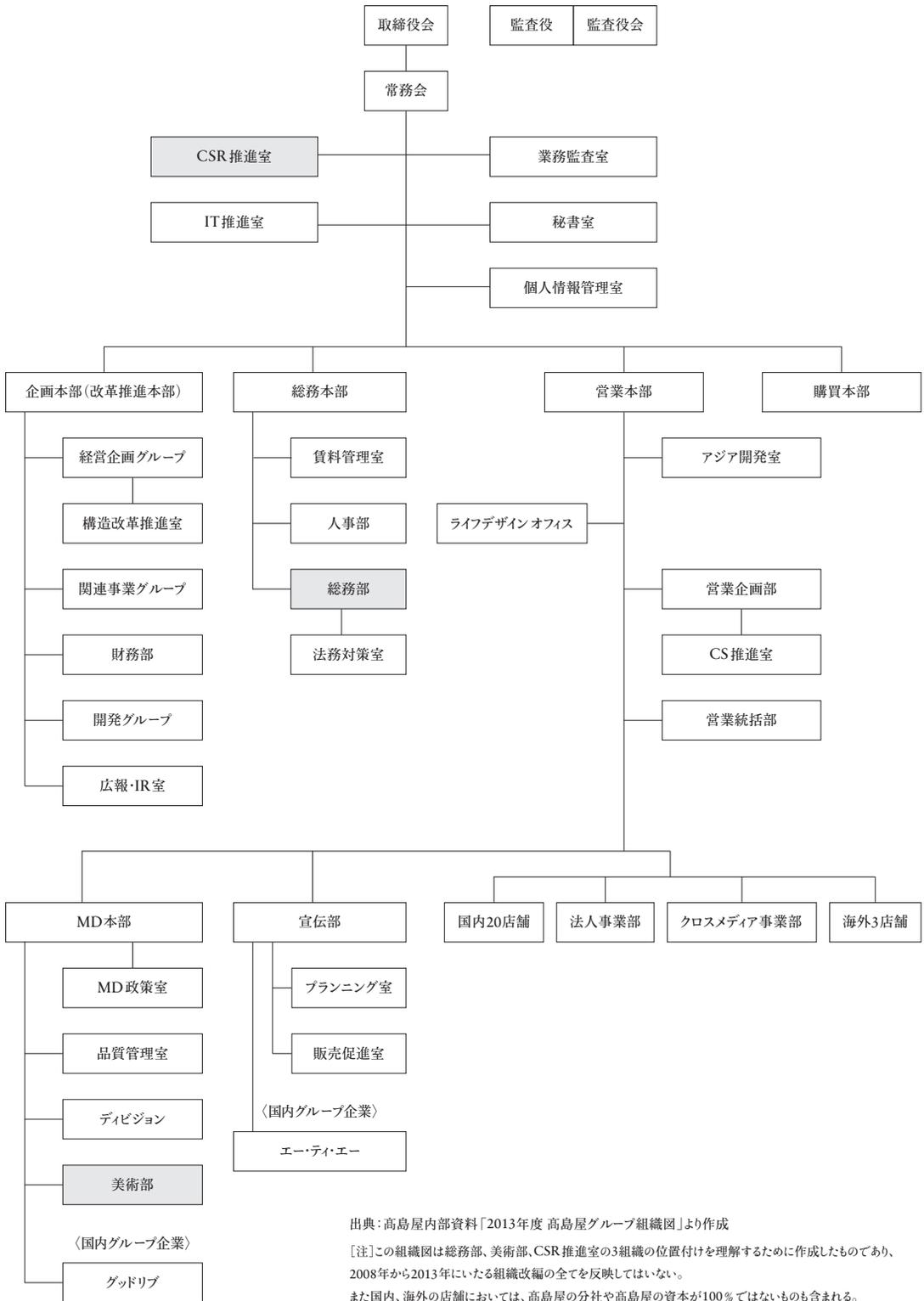


図3 —— 「高島屋史料館」(リーフレット)



出典：高島屋内部資料「2013年度 高島屋グループ組織図」より作成

[注]この組織図は総務部、美術部、CSR推進室の3組織の位置付けを理解するために作成したものであり、2008年から2013年にいたる組織改編の全てを反映してはいない。

また国内、海外の店舗においては、高島屋の分社や高島屋の資本が100%ではないものも含まれる。

図4 — 高島屋組織図

しい。そこで高島屋史料館所蔵資料の実態を把握するため、調査を実施した。

調査は2009年8月(5日間)ならびに2010年2月(4日間)の延べ9日間行った。史料館は、前述の通り展示施設をもつ。このほか社内外に対して、常時所蔵資料の貸出がある。そこで調査時点において保管場所がなく、その所在を確認できなかったものは調査対象から除外した。

本稿では高島屋史料館の所蔵資料を、文書、図書、モノの3つに大別し、これを分類とする。史料館が所蔵する資料全てに対し、この3分類がどのような割合を占めているのか、書架延長を比較の物差しとした。

- 文書	119.0メートル	9.7パーセント
- 図書	394.0メートル	32.1パーセント
- モノ	715.7メートル	58.2パーセント
- 総延長	1,228.7メートル	

高島屋史料館においては、モノ、図書、文書の順に所蔵資料が多いことが分かり、モノが過半を占める。所蔵資料全体に占める文書の割合は、1割にも満たない。

2-2：所蔵資料の特徴

上述の通り高島屋史料館においては、モノ、図書が所蔵資料の大半を占めている。そこで、高島屋史料館所蔵資料の概要把握の一助とするために、調査をする中で知り得た、高島屋史料館が所蔵するモノ、図書についていくつかを記す。

美術作品

高島屋史料館から提供を受けた資料「高島屋史料館所蔵品 分類、保存、調査状況」(2009年10月作成)によると、高島屋史料館では、美術工芸品、染織品、皇室関係、能衣装・能面・小物、染織品下絵という5つの柱のもと、美術作品が管理されていた。美術工芸品は、日本画、洋画、工芸、彫刻、版画、書、複製、飯田コレクションにより構成され、染織品は美術染織、一般染織、百選会、上品会の4つに細分される。これらは株式会社高島屋の資産として目録化され、年2回、所在確認(棚卸)を行う。ここには展示などを目的として屏風、軸、シートといった状態に表装された染織品下絵が含まれる一方、未整理のものも大量にあり、廣田孝(京都女子大学)を中心とした整理調査が進行中である[34]。美術作品と一口にいっても、その素材は多岐にわたり、保存のための望ましい環境は必ずしも一致しない。

高島屋販促物

高島屋では、販売促進を目的とした非売品の製品を、数多く生み出してきた。戦

35—高島屋史料館での図書の分類は、「百科事典」、「全集」、「叢書」、「美術全集」、「美術資料」、「画集・図録」、「絵画総合」、「日本画」、「洋画」、「書」、「工芸」、「陶磁」、「彫刻」、「東洋美術」、「西洋美術」、「文化催」、「高島屋」、「呉服」、「貿易」、「上品会」、「百選会」、「図案集」、「色彩」、「染織」、「外国染織」、「茶道」、「能」、「狂言」、「博覧会」、「建築・装飾」、「歴史」、「社史」、「個人伝記」、「風俗」、「日本地理(大阪)」、「日本地理(京都)」、「日本地理」、「外国地理」、「政治」、「統計」、「人事興信録」、「皇室」、「伊勢神宮」、「倫理」、「宗教」、「総合年鑑」、「博物館」の47種。

36—『新衣裳』とは、1902年に京都店が創刊した顧客向けの雑誌で、表紙に竹内栖鳳や上村松園らの絵を用いた。月刊で1910年11月の第100号で一時中止となり、以後年刊の頻度となり1916年まで続けられた。

37—大阪店では卸部を1946年に開設し、その第6部は京都にあった出版社の在庫と紙型を買い取り、本の販売に加えて出版事業に取り組んだ。第6部は出版部と名を改め、1946年10月から本格的な活動を始める。その取扱書目には、英語の参考書、小説、医学、労働関係があり、幅広い。1949年には新規の出版は取りやめられた。

前期にまでさかのぼるポスターやチラシといった、催事などの告知を目的としたものに加え、商品の包装に使う箱や紙、袋、そして顧客への配布を目的とした扇子や団扇類など多彩である。店頭を飾ったマスコット人形のように、素材が紙でないものも多い。こういった販促物の製作にあたっては、高島屋が画家に意匠を依頼し、史料館に収蔵されたその原画が美術作品に分類される場合もある。

写真

催し会場での催事、店舗の開店やリニューアルなどを記録した写真アルバムのように、高島屋各店で作成されたものがある。この他、史料館収蔵資料を撮影したものを展示に利用する写真パネルなど、史料館が作成、管理しているものも多い。その種類もフィルム(ポジ、ネガ)、デジタルデータ、紙焼など多様である。

視聴覚資料

高島屋がスポンサーだったテレビ番組、1989年に「年間売上げ1兆円達成」を告げる社内朝礼、高島屋美術部創設80年を記念して開催したシンポジウムなど、高島屋のさまざまな活動を記録した視聴覚資料がある。その記録媒体も、DVDのような光ディスク、カセットテープやVHSなどの磁気テープ、そして16ミリフィルムと多様性に富む。

図書の分類体系

史料館独自の分類に基づき、図書が主として2つの倉庫に配架されていた。その棚に示される分類は、「百科事典」、「美術全集」、「美術資料」、「画集・図録」、「日本画」、「洋画」、「工芸」、「陶磁」、「彫刻」、「東洋美術」、「西洋美術」、「文化催」、「高島屋」、「呉服」、「貿易」、「上品会」、「百選会」、「染織」、「茶道」、「能」、「博覧会」、「社史」、「風俗」、「日本地理(大阪)」、「日本地理(京都)」、「人事興信録」、「皇室」、「伊勢神宮」といった47種である[35]。

美術に関する分類が多いのは、史料館が美術作品を所蔵することと、高島屋が美術関係の催しを多く行ってきたという要因が考えられる。また呉服や染織品など高島屋が生み出してきた製品に因むもの、製品の納め先である皇室や伊勢神宮、創業の地である京都や史料館がある大阪に関する図書など、蔵書の分類体系は高島屋の社業を反映している。図書は史料館での利用頻度も高いことから目録も整備され、前出の「高島屋史料館所蔵品 分類、保存、調査状況」では9,700冊を数えた。

高島屋刊行物

高島屋はこれまでに社史をはじめ、社内報、あるいは『新衣裳』[36]といった顧客向けの配布物などを多数刊行している。また戦後の一時期には出版部[37]をもつ

ていた。上記の図書のうち、「画集・図録」、「社史」に分類されるものの中には、高島屋が刊行したものも含む。

38 — 2010年10月、高島屋史料館担当者への聞き取り調査による。

39 — 2009年8月、高島屋史料館担当者への聞き取り調査による。

40 — 注14参照。

2-3: 所蔵資料の分析

本稿では、高島屋史料館が所蔵する資料を、文書、図書、モノに3分した。本節では、いずれの分類にも企業アーカイブズとしての資料的価値をもつものがあることを明示するため、高島屋の企業活動との関連を分析する。

文書

史料館が所蔵する文書をその作成者により、以下の3つに大別する。

[創業家関係文書]

創業家関係文書は、江戸末期から昭和期に至る文書である。これらは2009年6月から目録作成が進行中であり、2010年9月末時点で3,000点を数え、総数は20,000点を超えるものと予想される^[38]。この作業を通じ、文政、安政といった年記のある文書が確認され^[39]、高島屋が創業した天保年間よりも年代が遡るものも含まれていることが分かった。

[高島屋文書]

『取締役会決議録』、『営業報告書』など高島屋の経営に関するもの、美術部、人事部といった業務部門ごとの文書、高島屋各店で発行されていた社内報、建築事業^[40]のように現在は別会社となった組織による文書も含まれている。年代幅も、明治期から平成までと幅広い。

[史料館文書]

高島屋史料館の営みを示す文書であり、史料館の設立以前の記録である『史料館開設に関する資料』にはじまり、日常を記した『日誌』、所蔵資料の貸出にともなう『所蔵品貸出控』といった表題をもつファイルなどがある。年代幅は、開設前年の1969年からのおよそ40年である。

図書

ここでは対象をしぼり、図書の分析を行う。その対象を、高島屋史料館での分類が「個人画集」とされるもののうち、作者の頭文字が「あ」から「う」に該当するものとする。調査は2009年12月に実施し、発行年は1900年から2009年にわたる269冊であった。調査手順は、高島屋史料館から提供を受けた「蔵書リスト」をもとに、1冊ずつ実見した。「蔵書リスト」では棚番号、番号、書名、著者、発行所、発

41——高島屋美術部五十年史編纂委員会編『高島屋美術部五十年史』、高島屋本社、1960年 高島屋美術部80年史編纂委員会編『高島屋美術部80年史』、高島屋、1992年 高島屋美術部百年史編纂室、講談社エディトリアル編『高島屋美術部百年史』、高島屋、2013年
42——黙語会『黙語図案集』、芸艸堂、1908年 村山句吾『広重肉筆五十三次図』、国華社、1918年 池田遥郎『東海道五十三次図譜』、芸艸堂、1938年 東京市帝室博物館『御物 若冲動植綵絵精影』、吉田幸三郎、1926年 なお黙語とは、浅井忠の号。

行日、備考の7項目が採用される。備考からは、高島屋に関わる事項のみに注目した。そして図書にある蔵書印やラベルなどからは、かつての所在について新たな知見が得られた。この調査結果を分析することにより、図書と高島屋とのつながりにおいて、いくつかの傾向を見出すことができる。

高島屋各店で催された展覧会図録が161点を数え、調査対象の60パーセントを占めた。高島屋を会場とする展覧会には、催し会場のものと美術画廊でのものと大別される。美術画廊での催事とは、そこに出品される作品の販売を目的とする高島屋の企業活動のひとつである。そのため図録は販売を促進するための商品カタログという性格をもち、図録そのものが販売されることはほとんどない。刊行部数はわずかながらも、高島屋が制作した図録も多い。一般には流通せず、外部の図書館、また美術図書館においても、なかなか体系的に所蔵されることは少ない。そのためこれらは、高島屋を会場とした催しをたどる記録として重要である。ここには、『広重60回忌追善記念遺作展覧会目録』(1917年)や池田桂仙個展(1918年)など、大正期に高島屋で開催された催しの図録が含まれる。高島屋美術部は年史を刊行しており[41]、『高島屋美術部五十年史』の巻末には1909年から1959年までの主要催事の年表が掲載されていた。こうした年表と史料館が所蔵する図書と対照させると、新たな事実が判明する可能性もある。

また史料館が所蔵する美術作品が掲載されていた図書は13点、4.8パーセントであった。現在史料館が所蔵品の写真を貸し出す時には、高島屋史料館所蔵であることを記すように求めている。しかしながらある時点までは会社の意向により、所蔵を秘していた時期もあった。例えば1977年に神奈川県立近代美術館で開催された有島生馬展の図録には、現在高島屋史料館に所蔵される油彩画《橄欖畑》が「橄欖畑(小豆島)」として掲載される。図録を見る限りその所蔵者は明らかではないが、史料館文書『所蔵品貸出控』によって、展覧会の開催時点において高島屋史料館がこの作品を所蔵し、貸出の手续が行われたことが分かる。

さらに、図書のかつての所在を示す手掛りが残されている。それは蔵書印やラベルであり、19冊、調査対象の7パーセントを占めた。調査対象の中で最古の刊行物である『養素齊画譜 第2編』(1900年)は、高島屋の染織品に意匠を提供することもあった今尾景年の個人画集である。印「京都高嶋屋飯田新七東店」の枠内に「明治卅三年九月十五日」と刻字され、刊行の年に入手したことを示す。外国人向けの商品を扱っていた東店が所蔵していたことから、これを外国人の好みに応じた商品製作の参考としていたことが推測される。「大阪高島屋図案室」蔵書ラベルのある4冊は、購入日の欄に共通して「1961年」との記入があった[42]。4冊の刊行年はそれぞれ異なり、なおかつ購入日とは少なくとも20年以上の年月の開きがあることから、これら4冊は先行する別の組織からまとまってその年に移管されたのであろう。また1冊の図書に複数の旧蔵者が示される場合もある。『池大雅名画譜』(1923年)の表紙には、ひとつの印(「高島屋図案部蔵」とラベル2枚(「京都高島屋

図案部図書蔵」、「参考室所蔵」があった。また『十畝画選』(1926年)には、「高島屋呉服店刺繍部之蔵書」印の他、「宝屋図書」ラベルが貼られていた。後者は「高島屋呉服店刺繍部」から関連会社「宝屋」[43]に移管され、さらに史料館に伝えられたものと推測される。ラベル類からは、図案部あるいは図案室が京都店と大阪店にあったことなど、高島屋のかつての組織やその変遷をうかがい知ることができた。「参考室所蔵」ラベルが貼付される図書が13点と多いことから、これが史料館に先行する組織として、その機能と場所、設置時期などの検討が今後必要である。

モノ

高島屋史料館のリーフレットにおいて、モノは史料館の所蔵資料を代表するかのような印象を与える。また先述の調査に基づく書架延長では、モノは全体のおよそ6割を占め、量において他を圧倒する。そこで、膨大な量にのぼるモノから展覧会に出陳された一群を選び、これを分析の対象とする。

本稿冒頭でも触れたように「高島屋百華展」は2010年に開催され、その副題は「近代美術の歩みとともに」とされた[44]。明治以来平成に至る間に生み出された、高島屋史料館が収蔵する資料を紹介する展覧会であった。これまで美術展などに貸出される収蔵資料は、モノの中でも美術作品が主であった。しかしながらこの展覧会の特長ともいえるのが、モノは美術作品だけにはとどまらない幅広い出陳物とし、それに加えて図書、文書と、多彩な高島屋史料館の収蔵資料を用いたことである。展覧会の主眼は副題にもある通り、高島屋の歩みを近代美術とともにとらえることであった。言い換えるならばこの展覧会は、美術という切り口をもって、高島屋の足跡とその社業の広がりをも表すものとなった。

展覧会は、「第1章 近代美術の巨星たち」、「第2章 京都画壇と美術染織」、「第3章 高島屋 美のスピリッツ」という3章と資料から成る。図録(図5参照)に掲載される出品目録[45]によると、作品106点、資料38点である。しかしながら『小扇子(製品)』(資料番号32)は9点あり、展示された実際の数と目録上の点数は一致しない。また展覧会場には資料が2つ追加されており、『飯田新七宛京都画家書状』(資料番号40)4点は、2009年以来の創業家関係文書整理作業の成果のひとつである。そこで出品目録を補ったものを表2とした。作品の場合は、章、節、No.、作品名、作者名、制作年という6項目を示し、一方資料は資料番号、資料名、制作年の3つである。そしてそれぞれをモノ、図書、文書のいずれかに分類した。

以下、展覧会の構成に従い、出品物の中からモノに注目し、展示物と高島屋の企業活動との関係性を分析する。本文中で作品名を表わす時には《 》を、資料名には『 』を付して表記する。また作品の番号は(No.)、資料の場合は(資料番号)とする。

「第1章 近代美術の巨星たち」は、日本画27点(うち1点はポスター)、洋画10点、彫刻・陶芸8点の総計45点により構成される。「高島屋史料館所蔵の近代

43 — 宝屋は、京都本店におかれていた刺繍や染色加工を業務とする専職本部を、戦時体制下の1941年に百貨店から切り離し発足させた別会社、丸高染織を前身にもつ。その後、幾度かの社名変更を経て、1947年に宝屋となる。『高島屋135年史』の記述によると、1919年、株式会社高島屋呉服店設立当時の本店所在地が京都市下京区烏丸通高辻下ル因幡堂町661番地であり、そこが「飯田元締所 現在宝屋」とされる。元締所とは、1897年高島屋の全事業を統括する機能をもつ組織として設置され、四代新七を総帥として高島屋の呉服、貿易その他商売全般の企画本部が置かれた。すなわち組織であり、またそれが置かれていた場所を示す。当初、東店の南側にあったが、場所の変遷を何度か経て、「高島屋150年史」では、「中央部2階に移り、1951年8月宝屋が入居する」とある。この中央部が本店を指すものと思われる。なお、1912年に新築開店された烏丸店の住所は、烏丸通高辻下ル薬師前町である。烏丸通を挟み、烏丸店と本店が別に置かれていたこととなる。この項は、「関連会社：株式会社宝屋」、高島屋150年史編集委員会、前掲書、1982年、463頁。「元締所の設置(明治30年-1897)」、同書、69頁。「本店と本社」、高島屋135年史編集委員会、前掲書、1968年、266頁による。

44 — 注9参照。

45 — 「出品目録」、「高島屋百華展：近代美術の歩みとともに」、京都市美術館、高島屋史料館、朝日新聞社大阪企画事業部編、朝日新聞社、2010年、166-171頁

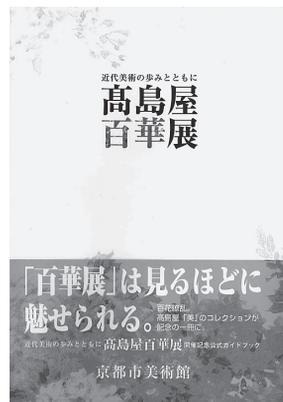


図5 — 「高島屋百華展」図録

表2 — 高島屋百華展出品目録

節	No.	作品名	作者名	制作年	分類
第1章 近代美術の巨星たち					
日本画	1	贈君百扇	富岡鉄斎	明治—大正13年	モノ
	2	盆踊図	富岡鉄斎	明治33(1900)年頃	モノ
	3	富士	竹内栖鳳	明治26(1893)年	モノ
	4	蓬莱山	横山大観	昭和24(1949)年	モノ
	5	竹の図	横山大観、下村観山	大正初期	モノ
	6	アレタ立に	竹内栖鳳	明治42(1909)年	モノ
	7	婦人図	北野恒富	昭和4(1929)年	モノ
	8	キモノ大阪春季大会〔ポスター復刻版〕	北野恒富	昭和4(1929)年	モノ
	9	縁のつな	勝田哲	昭和7(1932)年	モノ
	10	潮騒	川端龍子	昭和12(1937)年	モノ
	11	風神雷神	富田溪仙	大正6(1917)年	モノ
	12	呉竹庵杉戸〔竹〕	横山大観	大正8(1919)年	モノ
	13	高島屋美術部	富岡鉄斎	大正8(1919)年	モノ
	14	如月会寄せ書き		昭和22(1947)年	モノ
	15	重陽会寄せ書き		昭和24(1949)年頃	モノ
	16	狩の図	和田三造	昭和10(1935)年頃	モノ
	17	みやまの四季	前田青邨	昭和32(1957)年	モノ
	18	椿花	小倉遊亀	昭和44(1969)年	モノ
	19	富士明る	安田靉彦	昭和46(1971)年	モノ
	20	白と赤の朝	中村貞以	昭和42(1967)年	モノ
	21	富士太鼓	森田曠平	昭和46(1971)年	モノ
	22	茜	小野竹喬	昭和53(1978)年	モノ
	23	月光富岳	池田遥郎	昭和55(1980)年	モノ
	24	玄花	山口華楊	昭和54(1979)年	モノ
	25	深山湧雲	東山魁夷	平成元(1989)年	モノ
	26	霧晴るる湖	奥田元宋	昭和62(1987)年	モノ
	27	ヘルセボリス炎上	平山郁夫	昭和51(1976)年	モノ
洋画	28	大原女	浅井忠	明治38(1905)年	モノ
	29	支那絹の前	岡田三郎助	大正9(1920)年	モノ
	30	花束	川口軌外	昭和8(1933)年	モノ
	31	正月の子供	熊岡美彦	昭和8(1933)年	モノ
	32	六月の郊外風景	小出楯重	昭和5(1930)年	モノ
	33	桜島	梅原龍三郎	昭和10(1935)年	モノ
	34	花飾り	東郷青児	昭和24(1949)年頃	モノ
	35	福浦港風景	中川一政	昭和31(1956)年	モノ
	36	孔雀	須田国太郎	昭和24(1949)年頃	モノ
	37	民家(白路梅花)	向井潤吉	昭和52(1977)年	モノ
彫刻・陶芸	38	大黒天像 有徳福来尊像	平櫛田中	昭和50(1975)年	モノ
	39	烏鉢	河井寛次郎	昭和27(1952)年	モノ
	40	銀刷毛目耳壺	北大路魯山人	昭和29(1954)年	モノ
	41	竹梅色絵角瓶	富本憲吉	昭和33(1958)年	モノ
	42	色絵今年竹茶碗	楠部彌弌	昭和54(1979)年	モノ
	43	黒茶碗	14代樂吉左衛門	昭和54(1979)年	モノ
	44	古稀彩紫陽花花瓶	6代清水六兵衛	昭和55(1980)年	モノ
	45	仁清写 唐松茶壺	16代永樂善五郎	昭和63(1988)年	モノ
第2章 京都画壇と美術染織					
	46	ベニスの月	竹内栖鳳	明治37(1904)年	モノ
	47	吉野の桜	都路華香	明治36(1903)年	モノ
	48	ロッキーの雪	山元春挙	明治38(1905)年	モノ
	49	老松鸞虎図〔染織品〕	刺繡加藤辰之助、下絵岸竹堂	明治17(1884)年	モノ
	50	金地虎の図〔染織品〕	友禪村上嘉兵衛、下絵岸竹堂	明治中期	モノ

美術の名品を紹介」[46]しようとするものであり、高島屋とのつながりは必ずしも明白ではない。

まずいくつかは、高島屋美術部の活動と結びつけることができた[47]。竹内栖鳳《アレタ立に》(No.6)は、1909年、第3回文部省展覧会(文展)の出品作である。同年、高島屋の京都店で開催された「現代名家百幅画会」に番外として出陳されたことが、史料館に収められている画集と出品目録(資料番号39)から分かる。この展覧会を契機として発足した美術部はまず1911年、大阪店(心齋橋)に置かれた[48]。1919年、心齋橋の店が漏電により焼失し、美術部は近くに新設された店舗に移る。富岡鉄斎が揮毫した《高島屋美術部》(No.13)は、その江戸堀の店に掲げられていたものである。また平櫛田中《大黒天像 有徳福来尊像》(No.38)は、かつて南海店の美術部の入口を飾っていた。高島屋美術部は、活動の場を京都とする作家たちとの親睦の会を設け、定期的にもたれた会合での寄せ書きが残る(No.14、15)[49]。この他、高島屋美術部での展覧会出品作であり、その図版が個展図録に掲載されるものには、池田遥郵《月光富岳》(No.23)、山口華揚《玄花》(No.24)、奥田元宋《霧晴るる湖》(No.26)、向井潤吉《民家(白路梅花)》(No.37)などがあった[50]。陶芸の場合は、同じ時に作られ、題名も同じ作品が複数点存在することもある。図録などに掲載される写真は、そのうちのひとつを写したものに過ぎない。そのため、出品されていたかを判断するにあたり、写真や作品名だけをその材料とすることは充分ではない。河井寛次郎(No.39)や北大路魯山人(No.40)、14代樂吉左衛門(No.43)、6代清水六兵衛(No.44)の作など、制作された年と同じ年に高島屋での展覧会が開催されている。そのため、その時の出品作とも推測されるが、正確を期すならば、美術部の記録や箱書による裏付けが求められよう。

高島屋の催事に関わるものでは、北野恒富《婦人図》(No.7)は催事を告知するポスター(No.8)の原画である。また、日本美術院の創立50周年再興第32回院展の大阪会場を高島屋が引き受け、戦後間もない1947年に大阪店の地階食堂跡で催された。それに対し、出品作家であった横山大観が礼として与えたのが、《蓬莱山》(No.4)という[51]。

また高島屋が製品の製造にあたり、その意匠としたものもいくつかある。紀元2600年を機とした東京博覧会が計画された時、高島屋は綴れ織りによる屏風の出品を予定した。その下図として依頼されたものが、川端龍子《潮騒》(No.10)である。結局のところ博覧会は実現しなかったが、1939年に藤原銀次郎が日本の産業界を代表する立場で訪独してナチスの大会に参加した折に、綴れ織りを壁掛に仕立て、ヒトラーへの土産とした[52]。そして前田青邨《みやまの四季》(No.17)は、大阪の毎日ホールに装飾部が納めた緞帳の原画である。

この他、京都伏見本町(現・伏見区深草正覚町)に1914年、完成披露した高島屋の迎賓館で使われていた板戸《呉竹庵杉戸「竹」》(No.12)のような例もある。

46 — 吉中充代「第1章解説」、同書、19頁

47 — 以下断りのない限りこの項は、高島屋美術部80年史編纂委員会、前掲書、1992年および高島屋美術部百年史編纂室、講談社エディトリアル編、前掲書、2013年による。

48 — 京都店においては、1942年に美術課が設置され、1948年に美術部となった。

49 — 吉田博一談「如月会と前社長さん」、高島屋美術部五十年史編纂委員会、前掲書、1960年、329頁ならびに「美術部：戦後の方針きまる」、高島屋135年史編纂委員会、前掲書、1968年、250、253頁

50 — 2010年10月に実施した高島屋史料館所蔵の図書調査に基づく。

51 — 「横山大観筆 蓬莱山の図(250×230cm)本社所蔵」、高島屋135年史編纂委員会、前掲書、1968年、251頁

52 — 川端龍子「『潮騒』について」、高島屋美術部五十年史編纂委員会、前掲書、1960年、184頁

節	No.	作品名	作者名	制作年	分類
	51	桐に鳳凰	岸竹堂	明治中期	モノ
	52	旭陽桐花鳳凰図〔染織品〕	友禪村上嘉兵衛、下絵岸竹堂	明治中期	モノ
	53	巖島紅葉溪図	幸野樸嶺	明治中期	モノ
	54	紅葉溪図〔染織品〕	下絵幸野樸嶺	明治中期	モノ
	55	三十六歌仙図〔染織品〕	友禪村上嘉兵衛、下絵田中一華	明治20(1887)年頃	モノ
	56	牡丹図〔染織品〕	友禪村上嘉兵衛、下絵谷口香嶺	明治28(1895)年	モノ
	57	秋草に鶉〔染織品〕	唐織5世伊達彌助、下絵今尾景年	明治23(1890)年	モノ
	58	芒に蝶図〔染織品〕	唐織5世伊達彌助	明治25(1892)年	モノ
	59	光琳風草花	神坂雪佳	明治後期	モノ
	60	四季花鳥図卓布	作者不明	明治42(1909)年頃	モノ
	61	雪の金閣寺〔染織品〕	作者不明	明治中期	モノ

第3章 高島屋 美のスピリッツ

ポスター	62	明治美人	作者不明	明治末期	モノ
	63	十二単	監修神坂雪佳	明治末期	モノ
	64	京舞妓「若松」	北野恒富	大正5(1916)年	モノ
	65	矢の根五郎	北野恒富	大正5(1916)年	モノ
	百選会	66	第55回夏の百選会〔ポスター〕	今竹七郎	昭和11(1936)年
67		第18回百選会〔ポスター〕	作者不明	大正10(1921)年	モノ
68		暫〔訪問着〕		昭和27(1952)年	モノ
69		花の泉〔訪問着〕		昭和28(1953)年	モノ
70		画聖ヴァンゴッホ〔訪問着〕		昭和35(1960)年	モノ
71		着工祝〔訪問着〕		昭和38(1963)年	モノ
72		アトリエ開き〔訪問着〕		昭和43(1968)年	モノ
73		レゼイギユ〔訪問着〕		昭和46(1971)年	モノ
74		領地巡り〔訪問着〕		昭和48(1973)年	モノ
75		サルタン〔振袖〕		昭和53(1978)年	モノ
76		スーパーカー〔訪問着〕		昭和53(1978)年	モノ
77	ロマンドラ・ローゼ〔訪問着〕		平成3(1991)年	モノ	
上品会	78	豊公錦綾文〔振袖〕		昭和28(1953)年	モノ
	79	研庭〔振袖〕		昭和28(1953)年	モノ
	80	寿松扇面文〔振袖〕		昭和29(1954)年	モノ
	81	金寿陽輝〔衿襷〕		昭和33(1958)年	モノ
	82	美韻交響〔振袖〕		昭和41(1966)年	モノ
	83	南蛮渡り〔訪問着〕		昭和62(1987)年	モノ
	84	金唐華大唐花〔丸帯〕		昭和33(1958)年	モノ
	85	宝海寿波〔丸帯〕		昭和36(1961)年	モノ
薔薇	86	ばら	高岡徳太郎	昭和54(1979)年	モノ
	87	長春花	奥村土牛	昭和53-54(1978-79)年頃	モノ
	88	夏バラ	ラゲザ・玉	昭和10(1935)年頃	モノ
	89	ばら	伊藤清永	昭和30(1955)年	モノ
	90	薔薇図	梅原龍三郎	昭和54(1979)年	モノ
	91	高島屋の薔薇	絹谷幸二	平成16(2004)年	モノ
団扇〔洋画〕	92	ばら	林武	昭和33(1958)年	モノ
	93	ばら	小糸源太郎	昭和35(1960)年	モノ
	94	ばら	宮本三郎	昭和42(1967)年	モノ
	95	ばら	小磯良平	昭和43(1968)年	モノ
	96	ばら	鈴木信太郎	昭和47(1972)年	モノ
	97	ばら	田村孝之介	昭和49(1974)年	モノ
扇子〔日本画〕	98	めてたき富士	片岡球子	平成3(1991)年	モノ
	99	紅梅白梅	山口蓬春	昭和45(1970)年	モノ
	100	讃華	秋野不矩	平成11(1999)年	モノ
	101	薫風	堂本印象	昭和40(1965)年	モノ
	102	蘭	西山英雄	昭和53(1978)年	モノ

53 — 高島屋のマスコット人形は、1959年冬のクリスマスセールの装飾用としてのハッピーちゃんをはじめである。1960年には浩宮の誕生を祝い、ラッキーちゃんが作られた。現在、高島屋のマスコット人形とされるローズちゃんは、1962年の聖歌隊の人形に起源をもつ。

「第2章 京都画壇と美術染織」は16点の出品で、高島屋の製品としての染織品を見せようとするものである。ここに含まれる日本画は一個の美術作品というよりも、製品化を目的とした意匠という側面をもち、明治期の高島屋の活動を物語る。1910年のロンドン日英博覧会に、高島屋は独自の展示施設として高島屋館を設けた。そこに「世界三景」と題し出品した染織品の原画が、三幅対として構成される《ベニスの月》、《吉野の桜》、《ロッキーの雪》(No.46-48)の3点である。《桐に鳳凰》(No.51)と《旭陽桐花鳳凰図》(No.52)、また《厳島紅葉溪図》(No.53)と《紅葉溪図》(No.54)のように、下絵と製品とが対となって展示されるものもあった。

「第3章 高島屋 美のスピリッツ」の出展物の大半は、高島屋とのつながりが明確に分かる。まずは、高島屋が主催する呉服の催し「百選会」、「上品会」に関連するポスター、着物、帯などである。

また高島屋の販売促進活動と結び付けられるのが、「ポスター」、「薔薇」、「団扇」、「扇子」の4つである。ポスターのうちの2点は、北野恒富による日本画をその原画とする。ひとつ(No.64)は1916年に東京・南伝馬町に開店した東京店を、もう一方(No.65)は1919年に心齋橋店で開催された俳優衣裳陳列会を告知するものである。「薔薇」は、高島屋といえば思い浮かべる花であろう。しかしながら、高島屋と薔薇との結びつきは、薔薇を描いた包装紙を1952年に採用して以来のことであり、高島屋180年の歴史の中では比較的近年のこととなる。それ以降、薔薇をシンボルフラワーとして、薔薇をモチーフとする作品制作を画家たちに依頼し、それらを元にカレンダーや団扇などを製作して顧客へ配布してきた。こうした高島屋との関係性が確かであるのは、包装紙原画である高岡徳太郎(No.86)と、東京店リニューアルの記念粗品の原画となった絹谷幸二(No.91)の2点のみである。それ以外の4点(No.87-90)は、高島屋での展覧会出品作のひとつであるのか、あるいは薔薇ということで高島屋が収集対象としたものであるかの判別はつかない。「団扇」と「扇子」は、中元、歳暮期の高島屋の顧客への配り物の原画である。団扇6点(No.92-97)は、もっぱら薔薇をモチーフとしたものであり、それと対応する『薔薇団扇(製品)』(資料番号30)もあわせて出品された。扇子は、片岡球子《めでたき富士》(No.98)のように富士山に松竹梅をあしらったお目出度い絵柄、また撫子(No.103)や紫陽花(No.105)などのように、季節感を醸し出す。

資料は、博覧会、販促物、高島屋刊行物などに大よそ分けられる。国内外の博覧会での受領メダルの数々(資料番号2-12)は、明治期の高島屋の輝かしい受賞歴を今に伝える。1962年に誕生した高島屋のマスコット人形であるローズちゃん^[53]は、ブランドの洋服やご案内係の制服を身にまとう(資料番号33、35、37)。また個々の店の事情に応じたものもあり、泉北店開店30周年を記念した『バラ花東30本ローズちゃん』(資料番号38)はその一例である。

節	No.	作品名	作者名	制作年	分類
	103	撫子	上村松篁	昭和50(1975)年	モノ
	104	花菖蒲	加山又造	昭和61(1986)年	モノ
	105	紫陽花	上村淳之	昭和62(1987)年	モノ
	106	夕顔	森田りえ子	平成7(1995)年	モノ

資料

資料番号	資料名	制作年	分類
1	高島屋美術画報	大正10(1921)年	図書
2	バルセロナ万国博覧会メダル	明治22(1889)年	モノ
3	パリ万国博覧会メダル	明治23(1890)年	モノ
4	コロンブス世界博覧会メダル	明治26(1893)年	モノ
5	パリ万国大博覧会メダル	明治33(1900)年	モノ
6	ロンドン日英博覧会メダル	明治43(1910)年	モノ
7	第2回内国勸業博覧会メダル	明治14(1881)年	モノ
8	第12回京都府博覧会メダル	明治16(1883)年	モノ
9	京都色染織物繡織共進会メダル	明治19(1886)年	モノ
10	京都新古美術品展メダル	明治20(1887)年	モノ
11	京都美術博覧会メダル	明治21(1888)年	モノ
12	第4回内国勸業博覧会メダル	明治28(1895)年	モノ
13	パリ万国博覧会賞状	明治22(1889)年	モノ
14	コロンブス世界博覧会賞状	明治26(1893)年	モノ
15	パリ万国大博覧会賞状	明治33(1900)年	モノ
16	ロンドン日英博覧会賞状	明治43(1910)年	モノ
17	高島屋画工室勤休簿	明治22(1889)年	文書
18	高島屋貿易部写真帖		文書
19	新衣裳	明治43(1910)年	図書
20	新衣裳	明治41(1908)年	図書
21	新衣裳	明治43(1910)年	図書
22	新衣裳	大正6(1917)年	図書
23	新衣裳	大正2(1913)年	図書
24	生地見本帖	明治末～大正初期	文書
25	百華新聞	昭和2(1927)年、昭和4(1929)年	図書
26	パンフレット「京都染織祭 時代風俗衣裳展覧会」	昭和8(1933)年	図書
27	パンフレット「高島屋特選海水浴用品」	昭和9(1934)年	図書
28	パンフレット「第1回高島屋コードモ博覧会」	昭和12(1937)年	図書
29	大団扇(製品)		モノ
30	薔薇団扇(製品)		モノ
31	飾り扇子(製品)		モノ
32	小扇子(製品)		モノ
33	カルダンローズちゃん〔人形〕	昭和45(1970)年	モノ
34	礼装・振袖ローズちゃん〔人形〕	昭和48(1973)年	モノ
35	ウングアローズちゃん〔人形〕	昭和49(1974)年	モノ
36	舞妓ローズちゃん〔人形〕	平成2(1990)年	モノ
37	顧客(秋冬)制服ローズちゃん〔人形〕	平成2(1990)年	モノ
38	バラ花束30本ローズちゃん〔人形〕	平成16(2004)年	モノ
39	高島屋展覧会図録		図書
40	飯田新七宛京都画家書状		文書

高島屋百華展出品目録に加筆修正〔 〕は筆者による補記

出典:「出品目録」、「高島屋百華展:近代美術の歩みとともに」、京都市美術館、高島屋史料館、朝日新聞社大阪企画事業部編、朝日新聞社、2010年、166-171頁

2-4：高島屋史料館の企業アーカイブズとしての評価

本節では、調査(第1節)と資料の分析(第3節)の結果を考察することにより、高島屋史料館に所蔵される資料群に企業アーカイブズとしての資料的価値をもつものがあることを確認する。それゆえ、高島屋史料館は企業アーカイブズと評価しうる側面をもつ施設であることを明らかにする。

第1節に示した要領により調査を実施し、その資料を文書、図書、モノに大別した。そして書架延長を比較対象の物差しとした場合、高島屋史料館に所蔵される資料はモノ、図書、文書の順に多いことが分かった。

史料館が所蔵する文書の年代幅は、江戸末期からのおよそ200年間である。本稿ではこれらを作成者から、創業家関係文書、高島屋文書、史料館文書に3分した。高島屋文書、史料館文書はともに、高島屋の広範な企業活動の中で作成、収受された文書である。創業家関係文書には高島屋の創業年を遡る文書が存在することから、創業期の高島屋の他、創業家である飯田家にまつわるものもあると推測される。

図書は、史料館において「個人画集」と分類される図書の一部に対象を限定して、調査分析を行った。ここには、高島屋が制作者であるとは限らないが、高島屋における催事に即して刊行された図書が多数含まれていた。また史料館が所蔵する作品が掲載されている例もある。図書にある蔵書印などを検証することによって、高島屋の組織を見取ることができるばかりではなく、そうした組織においていかなる業務に参照されていたのかを推測する資料として図書を用いることもできる。

モノは、展覧会への出品資料群をその分析の対象とした。これらは史料館が独自に付している図書の分類と同様に、草創期の美術染織や博覧会、さらには今日にもつづく呉服、美術、販売促進、催事といった高島屋の社業を反映している。

高島屋は、古着木綿商、呉服商を経て、現在百貨店業を営む。高島屋史料館には高島屋の文書に加えて、製品としては呉服の他、販売促進を目的とするポスターやマスコット人形、カタログ、そして顧客向け粗品である団扇や扇子などのモノが収蔵されていた。モノにはこうした製品を生み出す意匠や、高島屋を会場とする催事に出品されていた例もある。図書は催事の記録という役割だけでなく、そこに押された所蔵印などに高島屋の組織の痕跡や業務との関わりとを読み取ることができた。すなわち高島屋史料館が所蔵する資料は、文書、図書、モノのいずれの分類においても、高島屋の企業活動との関連をもち、企業アーカイブズとしての資料的価値を有するものがあることは明らかである。従って高島屋史料館という組織を、企業アーカイブズと見なすことができる。しかしながら、図書、モノは対象を限定して分析したように、高島屋史料館が所蔵するもののすべてが、高島屋の企業活動とのつながりが明白であるとは限らない。そのため本論は、高島屋史料館の所蔵資料のすべてを無条件に企業アーカイブズであると結論づけるものではない。

54 — 2013年7月、8月に高島屋史料館、本社美術部、CSR推進室の各担当者への聞き取り調査を実施し、本章の多くはこれに基づく。また2013年に刊行された『おかげにて一八〇』、『高島屋美術部百年史』も用いた。

55 — 朝日新聞、日本経済新聞、読売新聞の3紙には新聞見開き2面大となる全30段を、また産経新聞、毎日新聞はその半分となる1面大の15段であった。制作は、高島屋グループの広告宣伝会社であるエー・ティ・エーが担った。

56 — 読売広告大賞「第28回読者が選ぶ広告の部」銀賞と第60回朝日広告賞「広告主参加の部」準朝日広告賞の2つ。

57 — 高島屋、タカシマヤ アーカイブス、<http://www.takashimaya.co.jp/archives/> (2013.09.30入手)

58 — 『おかげにて一八〇』は、1980年に刊行された創業150年記念誌『おかげにて 高島屋の百五十年』を下敷きとしている。これは全社員と、高島屋退職者による高和会会員に配布されたものであった。『おかげにて一八〇』の「はじめに」にも、「あなたの仕事の、日々の充実、お役に立てれば、幸いです」とある通り、従業員を読み手として想定していることが分かる。A4版による120頁以上に及ぶ冊子の他に英語版、中国語版もあり、その3分の1の大きさとなるコンパクト判は株主の他、高島屋の店頭で配布された。

59 — 「暮らしと美術と高島屋」展、会期：2013年4月20日～6月23日、会場：世田谷美術館、主催：世田谷美術館（公益財団法人せたがや文化財団）、協賛：高島屋。これを記念して、玉川高島屋での「高島屋史料館が語る 日本美術の輝き」（主催：高島屋史料館）と日本橋、横浜の店を会場とした2つの美術展とのスタンプラリー「たかしまやアートウォーキング」が開催された。なおこの展覧会では、所蔵者が高島屋史料館だけではなく、学習院大学史料館、個人などと複数であった。なおかつ三越や松坂屋といった他の百貨店についての資料も展示されたため、第2章第3節第3項におけるモノの分析の対象とはしなかった。

冒頭に掲げたように、「歴史や格式などに裏打ちされた文化的なイメージ」、「古くて新しい店」、「経営における先進性」、「近代的な同族経営」、「国際化を先取る」、「多角経営」など、高島屋にはさまざまな評価がなされてきた。高島屋の歩みを物語る企業アーカイブズとしての価値をもつ史料館の収蔵資料を用い、上記のような肯定的な企業イメージを裏付けることも可能であろう。こうした利用によって高島屋史料館に所蔵される資料は、高島屋の強みを増す道具として働くことができるのである。

3 — これからの高島屋史料館に求められる視点

本章では、創業180周年を祝した2011年以降の、高島屋での企業アーカイブズの活用事例をまとめる。さらにここ近年の高島屋史料館をめぐる情勢を総括し、今後、高島屋史料館に求められる視点を提言する[54]。

2012年1月10日、創業182年目を歩み始めたその日、グループ企業24社とともに高島屋は、見開き全段広告を新聞に出稿した[55]。昭和初期の京都烏丸店の店頭、300名を超える人物が威儀を正して揃う写真を大きく配す。そして、180年以上もの歴史を重ねた今日を、ここに写る人物のうち「誰が想像しただろうか。」とコピーがあらわれる。この企業広告は見る者に強い印象を与え、新聞社が主催する新聞広告賞を2つ受賞した[56]。

2013年4月、高島屋はウェブサイト「タカシマヤ アーカイブス」を開設した[57]。ここでは「高島屋の歴史」、「コレクション」、「高島屋史料館のご案内」についての情報を発信している。ほぼ時を同じくして、企業アーカイブズを活用した目覚ましい動きがいくつも見られた。

- 3月 180年史『おかげにて一八〇』刊行[58]
- 4月 『高島屋美術部百年史』刊行
「暮らしと美術と高島屋」展（会場：世田谷美術館）開催[59]
- 9月 「暮らしと美術と高島屋」展（会場：大阪高島屋）開催[60]

一方社内においては、高島屋史料館の組織異動があった。2013年2月に史料館は、本社美術部からCSR推進室[61]へ所管が変更された（図2参照）。こうした社内の変化を、ウェブサイト「タカシマヤのCSR」に感じとることができる。トップページにおいて「高島屋アーカイブズ活動」と題し、その目的と2013年度活用内容が述べられていた[62]。それによると、2013年を「アーカイブズ活動元年」と定め、上述の企業アーカイブズを利用した社史刊行、サイト公開、展覧会開催などに加え、従業員を対象とする「アーカイブズ講座」の実施が列挙される。

ここで、近年の高島屋史料館の社内的な位置付けを再確認する。1970年に史料館が設立されて以来変わることがなかった所管が、2008年6月に本社総務部から本社美術部へ、さらに2013年2月にCSR推進室に移管された。言い換えるならば、販売を支える後方部門から営業部門へ、そして5年も経たないうちに再び後方部門へと、高島屋史料館の所管が変遷したこととなる。2008年以來の本社美術部が所管していた時期の、高島屋史料館と企業アーカイブズに関わる事項を以下に示す。

- 2008年 6月 史料館、本社総務部より美術部へ移管
- 2009年 3月 「アーカイヴス・プロジェクト」発足
- 6月 創業家関係文書の目録作成開始
- 7月 「高島屋史料館所蔵名品展」
(会場：泉屋博古館分館(東京))開催[63]
- 12月 高島屋、企業史料協議会に入会
- 2010年 9月 「高島屋百華展」(会場：京都市美術館)開催
- 2012年 2月 CSR推進室に180年史編纂室設置
- 2013年 2月 史料館、本社美術部よりCSR推進室へ移管

2008年の移管は、2011年の高島屋創業180周年を見据えた時期のことであり、創業家関係文書の目録作成開始など、史料館が所蔵する資料活用への基盤整備が図られた。刊行物、展覧会といった資料活用の実りを目前としていた2013年に、高島屋史料館は再び後方部門に置かれる。これは、史料館が有する資料をいくつもの異なる用途で、なおかつ同じ時期に活用する経験を通じて、高島屋史料館の多面的な理解が育まれた。そして美術部という特定の営業部門よりも、後方部門であり全社的な視野をもつCSR推進室の方が、高島屋史料館を効率的に活用できるとの判断がなされたことによるものであろう。こうした位置付けの変遷は、設置母体である高島屋における史料館に対する認識の変容を自ずと表す。

ここで、『スコットランドにおける企業史料のためのナショナル・ストラテジー』(A National Strategy for Business Archives in Scotland)に基づき、CSR推進室傘下となった高島屋史料館が高島屋にもたらす恩恵を推定する。ここには企業がその企業アーカイブズを管理することによって、企業自身が享受する効用が16挙げられている[64]。これらを4等分したうちのコーポレート・アイデンティティ(Corporate Identity)という領域においては、「企業の業績を祝う」(Celebrate company achievements)、「CSR事業に貢献する」(Contribute to corporate responsibility programmes)、「肯定的な企業イメージを保持する」(Maintain a positive corporate image)、「従業員やステークホルダー(利害関係者)を関与させる」(Engage and inspire staff and stakeholders)という4つの効果を示す。これらはまさしく、2013年の

60 — 「暮らしと美術と高島屋」展、会期：2013年9月13日-9月30日、会場：大阪高島屋7階グランドホール、主催：産経新聞社、毎日新聞社、企画協力：世田谷美術館(公益財団法人せたがや文化財団)。「たかしまや大阪出店115周年記念」と銘打ったこの催しを主会場として、同時期に9階エキウエミュージアムのほか、近隣の高島屋史料館での「高島屋と美術家たち」展など、史料館の収蔵資料を展示する関連催事が開かれた。

61 — 1992年に本社広報室に置かれた企業文化担当を前身として、高島屋は1997年に社会貢献室を新設し、発足時の室長は経営企画室長と兼務した。その後、2005年に環境・社会貢献室と改め、さらに2006年のCSR推進室の発足となる。なお、CSRとはCorporate Social Responsibilityの略語で、企業の社会的責任と訳される。

62 — 高島屋、タカシマヤのCSR、<http://www.takashimaya.co.jp/corp/csr/index.html> (2013.09.30入手)

63 — 「高島屋史料館所蔵名品展」、会期：2009年7月18日-9月27日、会場：泉屋博古館分館(東京)、主催：泉屋博古館分館、日本経済新聞社。

64 — The Scottish Council on Archives, The National Archives of Scotland, The Business Archives Council of Scotland, The Ballast Trust, "A National Strategy for Business Archives in Scotland", Scottish Council on Archives, http://www.scottisharchives.org.uk/business/business_case_studies/1-national-strategy-for-business-archives-in-scotland.pdf, 2010, p.6 (2013.09.30入手) コーポレート・アイデンティティ、成長、資源、保護という領域に4分割され、効用が示される。

65 — 高島屋、「CSRの考え方」、タカシマヤのCSR、<http://www.takashimaya.co.jp/corp/csr/philosophy/index.html> (2013.09.30入手)

66 — 注58参照。

67 — CSR推進室担当者から提供を受けた高島屋内部資料による。

高島屋の企業アーカイブズ活用の実践例がもたらした成果に符合しよう。「高島屋グループCSR経営概念図」ではそのステークホルダーを、お客様、従業員、お取引先、株主・投資家、地域社会、地球社会としていた[65]。180年史の配布先には、こうしたステークホルダーの範疇が意識され[66]、そのうちの従業員を対象としているのが「アーカイブズ講座」である。

これまで高島屋史料館を紹介するリーフレットでは、美術作品がその収蔵資料の中心であるように表現されていた。180年史では以下の9つを収蔵資料の柱として表す。こうしたところにも近年の史料館収蔵資料の多角的な利用経験を経た、認識の変化を見取ることができる。

- 高島屋の歩み
- 美術収蔵品
- 広告・宣伝
- 販売促進
- 呉服と染織品
- 美術部の歩み
- 能装束
- 社内文書・資料
- 創業家関係文書

高島屋では現在、「高島屋アーカイブズ」、「高島屋アーカイブズ活動」を以下のように明文化する[67]。これらはともに、2013年2月の常務会で承認された。

「高島屋アーカイブズ」とは、創業以来の経営記録、営業記録、広告宣伝資料、絵画彫刻工芸の美術作品、呉服、能装束を含め今日に至るまで収集保存された史料総体を指す。そして、高島屋史料館は、資料の収集、保管、管理をするとともにアーカイブズ活動の拠点として、発信機能を持つ。

「高島屋アーカイブズ活動」とは、高島屋アーカイブズを活用した、当社がもつ基本的価値観をすべてのステークホルダーに共有、共感を促す活動であり、未来に向けた取り組みのこと。

常務会という、高島屋において取締役会に次ぐ協議あるいは諮問機関の場で、上記のような定義づけが承認されたことは大きな意味がある。これらは高島屋のアーカイブズの基本理念とも言え、対象とする資料の範囲とそれが置かれる組織としての高島屋史料館の機能、そしてこうした資料を用いて成し遂げようとする活動を規定する。

資料としては、創業以来今日に至るまでという収集資料の時代範囲が提示される。先に創業家関係文書という文書群を示した。ここには創業年を遡る文書が確認されているが、「高島屋アーカイヴス」の一文はそれを除外してしまう。また自明のこととして言及されていないのかもしれないが、高島屋の企業活動と資料との関わりが不明確である。ただし、高島屋史料館にすでに収蔵されている資料が念頭にあり、必ずしもそれらが企業活動との明白な結びつきがあるとは言えないため、このような表現がなされたのかもしれない。

さらに「高島屋アーカイヴス」は、高島屋史料館が資料の収集、保管、管理、発信という4つの機能をもつことを明示する。これらは大きな業務活動であり、いかなる活動をもって機能を果たすか。高島屋史料館は、活動を具体化させることを必要とする。その時に立ち返るべきは、指針としての「高島屋アーカイヴス活動」である。「高島屋アーカイヴス活動」の定義において、「高島屋アーカイヴス」の活用が前提とされ、当社、すなわち高島屋とそのステークホルダーの関係に言及する。従って明言されていないが、「高島屋アーカイヴス」とは、高島屋の企業活動を明かしてしようとする企業アーカイヴズであるということに他ならない。また高島屋史料館にとって高島屋は、親組織に当る。そのため高島屋史料館は、高島屋の企業アーカイヴズであり、その組織内に位置してその記録を保存する組織アーカイヴズと解することもできる[68]。今後、高島屋史料館に求められる視点とは、この企業アーカイヴズ、そして組織アーカイヴズという2つの立場によるものである。企業史料協議会創立30周年を記念した『企業と史料』では、11社の事例紹介があり、このうち企業アーカイヴズについては、花王、アサヒビール、キヤノンの3社の活動が報告される[69]。こうした国内の企業アーカイヴズの他、海外での豊富な実践例、さらには組織アーカイヴズでの先行事例も参考となろう[70]。

例えば、「高島屋アーカイヴス」で規定される高島屋史料館の機能のひとつに、発信がある。これについては、2013年だけでも年史、展覧会といった数々の活動実績がある。しかしながら展示については、ややもすればモノの魅力だけで構成されてしまいがちである。「企業の知的営為の記録への視点が欠落したままに、単なる「モノ」としての展示(もしくはその視点を見つけれない展示)とならないよう検討する必要があると思われる」[71]と指摘されるように、高島屋の企業活動との結びつきが示されないのであるならば、企業アーカイヴズによる展示活動としては物足りない。

また収集の対象を今日の高島屋とするならば、日本全国のみならず、海外にも事業展開していることから、相当な広範囲となる。それでもなお、対象を拡張しようとするのであれば、高島屋の歩みに立ち戻り、今日まで連続と続く業態ばかりでなく、グループ会社、あるいは丸紅のように分離して別会社となった輸入業などへと眼を向けるべきである。今日の高島屋の主要事業である百貨店業にとらわれ、同業他社の資料を収集対象に加えることは、高島史料館の企業アーカイヴズ、また組織アーカイヴズとしての意義を弱めてしまうだろう。

68 — 組織(in-house)アーカイヴズは、また機関(institutional)アーカイヴズとも言う。企業アーカイヴズと組織アーカイヴズについては、松崎裕子「世界のビジネスアーカイヴズ」、洪沢栄一記念財団実業史研究情報センター、前掲書、2012年、1-13頁に詳しい。

69 — 「第2部「企業の歴史と日本の近代化」を会員企業の史料活動に見る」、『企業と史料』第7集、2011年、49-111頁 企業アーカイヴズの他には、会社史編纂、企業博物館の分野で、ダイキン工業、味の素、清水建設、資生堂、パナソニック、トヨタ自動車、帝国データバンク、山口銀行の関係者が執筆した。

70 — 組織内に置かれるアーカイヴズという観点からは、都道府県などの地方自治体に置かれる公文書館、また大学など教育機関にあるアーカイヴズなども同じく、組織アーカイヴズである。活動の具体化の検討に当たっては、組織アーカイヴズでもある広島県立文書館の業務活動分析も有用である。安藤福平「DIRKSマニュアルを適用した業務活動分析について」、『広島県立文書館紀要』第9号、2007年、101-118頁

71 — 高島正憲「企業におけるアーカイブの系譜と存在 — 企業資料の活用を实践する場として」、『レコード・マネジメント』57号、2009年、55頁

常務会で承認された「高島屋アーカイヴス」により、高島屋史料館が収集、保管、管理、発信という4つの機能をもつことが明確となり、資料の年代幅も示された。史料館はこれから、それぞれの機能を果たすための活動を具体化し、いずれかに偏ることなく実績を重ねて行く。その時には、企業アーカイブズ、そして組織アーカイブズという視点が求められる。そしてこうした視点に基づいた、高島屋史料館の均衡のとれた着実な活動がコーポレート・アイデンティティ、すなわち「高島屋らしさ」を浮かび上がらせ、「高島屋アーカイヴス活動」を具現化するものと確信し、むすびの言葉とする。

本稿は、2011年1月に学習院大学大学院人文科学研究科アーカイブズ学専攻に修士論文として提出した「企業資料の保存・利用に関するアーカイブズ学的研究——高島屋史料館とその所蔵資料について」の第1章、ならびに第2章を基盤としたものである。高島屋本社美術部の方との個人的なつながりをはじめりとして研究がかない、調査、論文執筆を通じて、高島屋史料館、CSR推進室など、他部署の方々のお力を得た。さらに2013年に高島屋史料館、本社美術部、CSR推進室の各ご担当者へのインタビューを実施し、近年の事象を加味して成稿した。ここに記して感謝の意を表す。